

2024年4月7日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「まことの輝き」

聖書：マルコによる福音書9：2～13

ここは「山上の変貌物語」である。弟子らの前でイエスの姿が変わり、服は真っ白く輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白く輝いた。そしてモーセとエリヤが目の前に現われたのである。思わずペトロはこう言う。《先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです》ペトロが「仮小屋」と言ったのは、その場しのぎで、何とかこの栄光の姿を三人ともここに留めたかった。律法をもたらし、モーセと大預言者エリヤ、そしてキリスト・イエスを一つどころに留めることが出来たら、これはもうユダヤ人としてこれ以上の栄光はないのである。ペトロの心にはそのような思いがよぎる。

人の世とかけ離れた山の上に建物を建て、神を祀る。それは、あらゆる宗教の歴史を顧みる時に、どの宗教にも見られるものであろう。絢爛（ケンラン）豪華な建物を建てることに執着し、そこに神を納め、礼拝の場所を据えようとする。キリスト教の大寺院、仏教の大伽藍（がらん）、イスラムのモスク・・・いずれもこの世離れた建物の立派さを競い合っているかのようである。

ペトロの発言の後、栄光に包まれた神々しいイエスの姿は消え失せて、雲の中から厳格な神の言葉が聞こえてきた。《これはわたしの愛する子。これに聞け》。弟子たちは、山の上に三つの仮小屋を建て、モーセ、エリヤそしてイエスとを留めて置こうとした。神々しい雰囲気の中で、隔離された神秘的な場所で神を仰ぐことを願ったが、しかし神はこの世のただ中でイエスのみに聞き従いつつ生きることを示す。そしてイエスは山を降りて行く。人の世の痛ましさにさらされるためにである。

イエスの「まことの輝き」とは、その中から見い出して行くものであろう。この世にあって、小さくされた人々と共に歩み、病人に触れ、罪人と食卓を囲み、不条理な社会の中で、権力を振り回し、高ぶった人々に敢然とたたかいを挑むイエス。そしてその業のゆえに受難の道を辿るイエス。そこにこそ“まことの輝き”を見る者でありたい。（神谷）